

# 1961年度版小学校国語科教科書における 読書指導のあり方

Adoption of teaching of reading edition of Japanese Language Textbooks  
for Elementary Schools in the 1961

中 嶋 真 弓  
NAKASHIMA, Mayumi

## 1. はじめに

昭和33年10月1日小学校学習指導要領が文部省告示として発表された。昭和22、26年に記されていた「試案」という文字が消え、法的拘束力を持つこととなった。

国語科教育から見るならば、昭和30年代は、昭和20年代「経験主義」による学力低下が危惧され、その結果「能力主義」への気運が高まってきた時期である。それに伴い、今まで盛んであった「読書」にかわり、「読解」中心の授業がなされるようになったのである<sup>1)</sup>。

そこで、本小論では、昭和30年代の「能力主義」の国語科学習において、どのように読書指導がなされていたかを、昭和33年度小学校学習指導要領を受けて改訂された昭和36年度(1961)使用教科書を中心に、各学年ごとに分析しその特徴を明らかにするものである。

なお、教科書の分析を行うにあたり、対象教科書・取り上げる内容は以下のものとする。

- ・対象教科書：昭和36年度使用開始教科書 [日書] [東書] [大書] [学図] [教出] [光村] の6発行社の第1学年から第6学年のもの<sup>2)</sup> (6社としたのは、長期にわたり発行されており、これ以後の学習指導要領改訂期においても分析の比較ができると考えたためである。)

- ・取り上げる内容：全ての教材を対象に、そこに記されている「読書に関わる記述」

## 2. 第1学年から第6学年教科書に見られる読書指導のあり方

本章では、各学年の読書指導のあり方を見ていくものである。

昭和35年に出版された小学校国語指導書<sup>3)</sup>には、次頁〈表1〉にまとめたような「読書」の目標や指導事項等が見られる。

この中で、国語科教科書においてどのように読書指導がなされてきたかを、次の3観点より見ていくこととする。

- ①単元 単元名・特徴的単元：読書・読書指導に関わる単元(教材)を中心に記す。

②読書への働き掛け：特徴的単元に提示した以外の単元（教材）で、本文または手引きに「読書に関わる記述」がある単元を記す。例えば、読解教材終了後に、その教材に関わる他の本を読むように促す記述等がそれにあたる。なお、教材最後にある課題等が示されている箇所を、本小論では「手引き」と表記する。

③話題提供：「読書に関わる内容」がわずかではあるが教材の中に見られる単元を記す。

なお、必要に応じて単元名（●印）と教材名（\*印）で提示することがある。

〈表1〉昭和35年発行『小学校国語指導書』（文部省）に見られる読書指導の目標・指導事項

学	読書の目標	読書に関する指導事項	指導上の留意事項	読書指導に関する記述
一年	・やさしい読み物に興味をもつようにする。			・（指導事項の記述はない）この学年では、文章を読む方法の初歩をわからせていくと同時に、やさしい読み物に興味をもつように指導すべき
二年	・やさしい読み物を自分から進んで読むようにする。	・本や雑誌の読み方がわかること ・学級文庫の利用のしかたがわかること		・読書に関する初歩的な指導をすることが望ましい。児童にとって最も身近な学級文庫を利用して、能力や興味に応じた本や雑誌を自分から進んで楽しく読むことを指導する。本や雑誌を読んで特に興味をもったところを抜き出して、話し合ったり知らせ合ったりする指導とともに、学級文庫の図書をていねいに取り扱い出すことやその出し入れなどの初歩的な指導をし、進んで読書する意欲を起こさせていくようにする。
三年	・いろいろな読み物を読もうとする態度を育てる。	・読み取ったことを他人に伝えて楽しむこと。 ・学級文庫の利用のしかたがわかること	・読書の範囲が広がり、語句の習得が著しく伸びる時期	・前学年の学級文庫の利用を中心とした読書指導をさらに発展させ、学校図書館を利用する基礎的な経験を与えながら、いろいろな読み物を読もうとする態度を育てていく。興味をもった読み物の内容を他人に伝えたり、感想を話し合うように指導して、読書に対する興味が次第に高まるようにする。また、学級文庫のきまりを守って読むことの指導も必要である。
四年	・読む量をふやし、読み物の範囲を広げるようにする。	・知るために楽しむために本を読むこと ・学校図書館の利用の仕方がわかること	・第3学年に引き続いて読書の力が目立って伸びる時期（中略）いろいろな読み物に親しませて、経験を広め心づきを豊かにするように努める。	・第3学年を受けて、さらに読書の量や読み物の範囲を広げることをねらう。そのためには、「知るため楽しむために本を読むこと」を指導し、何のために読むのかという目的をもって読む態度を養う。
五年	・読み物の範囲を広げ、読み物を自分で選択することができるようにする。	・自分の読書のしかたを反省して、その向上を図ること ・国語辞典などが使えること		・「読み物を自分で選択することができるようにする」ことがねらいである。そのためには、なんのために読むのかという、読むための目的をはっきりさせることが大事である。その上でさらに自分の生活目的になった読み方をしていくかどうか、「自分の読書のしかたを反省して、その向上を図る」態度を養うことが必要である。
六年	・よい読み物を選んで読む習慣をつける。	・どんな本がよいかを見分け、よい本を選ぶこと		・「読み物の内容と読む目的に応じて、それに適した読み方をする」ことに重点をおく。 ・調べるために読む場合には、特に、「文章の組立や叙述に即して正確に読む」ように指導する。

## （1）第1学年の読書指導のあり方

### ①単元から

#### a. 単元名から

単元名では、教材名そのものを提示している場合も多くみられる。その中で、特に文学的な文章の単元を見ていくと、第1学年では多くの場合「昔話・童話・物語・民話」となっており、それらのジャンルを総括して「おはなし」としてまとめている発行社が多い。しかし、[教出]では、「昔話」「童話」といったジャンルでの提示をしている。また、[学図]「よみましょう」「本を読もう」、[光村]「ひとりでもみましょう」「よくよんで」等のように、目標となる表現が提示されているものもある。

## b. 特徴的単元

[学図] では、「本の扱い方の指導」として、「●本をよもう \*本をだいに」を第1学年10月に位置付けている。本文を見てみると、「○本をだいにするには、どんなことにきをつけたらいいでしょう。」とあり「机の上に整頓された本・手洗いをする女の子・乱れている本棚の整理をする女の子・よい姿勢で読書する男の子・正座をしながら机の上の本を片付ける女の子」の挿絵が載っている。自分達の読書生活を教科書の挿絵や自分達の経験を通して振り返らせ、「気を付けるべきこと」を考えさせていく指導は、低学年の子ども達にも理解できるのではないかと考えられる。お話に興味をもつ時期に、利用指導を行うことは、今後の本との関わりにおいて重要であり、そして、低学年からこのような指導を積み上げていくことによって、習慣化されると言える。

### ②読書への働き掛け

第1学年においては、言葉を獲得する段階として先ず、教材を読むことが中心であるために、教材文の文末や手引きにあたる部分に、読書に関わる働き掛けはほとんど見られない。もちろん、投げ掛けはなくても、例えば昔話そのものが提示されれば子ども達にとってそれ自体が読書への啓発となるであろうが、ここでは、記述されている内容を見ていくこととする。具体的な働き掛けとしては、[教出]「●おはなし \*ろばうりのおや子 \*おむすびころりん」では、「えをみながら、いろいろなおはなしをききましょう。」「きいたおはなしを、ともだちとはなしあってみましょう。」とある。これは、紙しばいや本の挿絵を活用しながら、楽しみながら<sup>4)</sup>積極的な読書ができるようにしていると言える。

第1学年の導入期では、絵とともに、例えば、[日書]「えほんがあるよ。」「大書」は、教室の背面掲示に「きんたろう」の挿絵が4枚掲げられており、[学図] では、「ほんをよみます。おもしろいほんです。」とある。[光村] では、「(教師がお話の本を持っている挿絵があり) おはなしのほんうれしいな。」とある。このように直接本と関わらせる文言も見られる。

### ③話題提供

[学図] の「ゆうびんごっこ」の単元では、手紙を書く活動があるが、その中である児童が「一すんぼうしに」手紙を書いた内容が載っている。読んだ楽しさを表現したり、発信したりする1つの方法として、「次の物語を読んだら、主人公に手紙を書いてみよう」という思いを子ども達にもたせることができるのではないかと考える。

## (2) 第2学年の読書指導のあり方

### ①単元から

#### a. 単元名から

[東書]「たのしい本」、[学図]「本を読もう」という直接読書に関わる単元名が見られる。[学図] では、この単元で「読書活動」や利用指導につながる内容を取り上げている。

## b. 特徴的単元

[日書]「●紙しばい \*紙しばいのせつめい \*白ウサギ \*紙しばいの工作」の単元がある。これは、「白ウサギ」の紙しばいを自分達で作って行うという単元である。朗読学習と書写学習をねらいにしたものであるが、読んだものを紙しばいにして発信するという一連の学習活動は、1年生[学図]で見られたお手紙と同様、読みを通して得た学びを発信する楽しさがあると考えられる。この教材の本文の最後に「こんどの子ども会で、この紙しばいをします。」とある。目的・相手意識をもたせながら、学習活動ができるように工夫されている。読みを紙しばいで発信する単元は、他の発行社にも見られる。

- ・[大書]:「●物語 \*かぐやひめ \*かみしばい作り」  
:「●お話 \*おむすびころりん」:「このお話を紙しばいにして」
- ・[教出]:「●おはなし \*かみしばい \*せみとり」  
:「●どうわ \*小人といもむし」:「このおはなしの紙しばいを作しましょう。」

[学図]では、「●本を読もう \*がっきゅうぶんこ \*小鳥になった木のは \*とうだいの話」の3教材が見られる。「がっきゅうぶんこ」の内容を整理してみると「①本の扱い方(・手洗い・頁を折らない・本を伏せない・つばをつけない・放り出さない・書架に片付ける)②本の種類が増えたこと③(先生が)本を読んでおもしろいと思ったところやすきなところは絵に描いて短いことばも付けるとよいと言われたこと④その絵が完成して教室に貼られたこと」の4点記されている。第1学年に引き続き、「利用指導」の内容とともに、③にあげた内容から「読書ノート」への初歩的な指導がなされていると考えられる。

[教出]では、次のような特徴的単元が見られる。

- A「●ざっし」:この単元は、「子どものくに」という雑誌を読むものである。雑誌には、説明文・クイズ・物語・漫画・工作の5種類の読み物が載せてある。
- B「●せつめい文 \*しょうぼうしゃ」:「しゃかいの本で、しょうぼうのところを読んでみましょう。本やざっしで、しゃしんをせつめいしている文を読みましょう。」
- C「●おはなし作り \*ぼうけんのおはなし」:「本のことを話し合ひましょう。①どんな本を読みましたか。②おもしろかったのはどの本ですか。③本を読むときは、どんなちゅういがたいせつですか。」
- D「●めずらしいどうぶつ \*カンガルー \*きりん」:手引き「りかの本で、どうぶつのが書いてあるところを読みましょう。」「つぎのことを書いた本をよみましょう。  
①どうぶつのこと ②のりものこと ③とおい国のこと ④むかしの人のこと」「本やざっしを読んで、知ったことを、きょうしつでみんなにはなしましょう。」(A~Dにある波線は、筆者によるもの)

Aでは、雑誌という多くのジャンルを有する書物を読ませることによって多彩な文章を読む経験ができるようにしている。そして、この単元以降「雑誌を読む」という表記が時々みられる。つまり、ここで指導した多くのジャンルに目を向ける読み方を以後継続的に指導し

ていると言えるのである。

B・Dは、説明的な文章であるが、手引きに「社会の本で、理科の本で・・・」とあるように、他教科との関連並びに、9分類でなく社会や理科の3・4分類にも目を向けるように配慮されていることが分かる。

Cでは、手引きのところに前述した内容があるが、①「どんな本を読みましたか。」の投げかけでは、「ざっし」（ジャンルの広がり）、「せつめい文」（社会的な読み物）という単元の並びから考えて、物語ばかりでなく多くの分類に目が向いたかどうか等の自己の読書生活の振り返りをさせる機会となっていると考えられる。また、本についての意識を高めるといふ点においても、効果的だと言える。

### ②読書への働き掛け

- ・[大書]:「かさじぞう」:『かさじぞう』のほかに、知っているお話があったら、みんなのまえで話してみましよう。」
- ・[学図]:「かざりまどのねこ」:「この話を、おとうとやいもうとや、小さな友だちに話してあげましよう。」
- ・[光村]:「ガリバーのたび」:「ガリバーが、小人の国へ行ったお話を知っていますか。知っていたらお話をしてみましよう。」

[大書][光村]では、そのお話に関わる内容から、読書へ向かわせようとしており、学習活動としては、友だちに伝えるという形式をとっている。[学図]でも、同様の伝えるという活動を採用しているが、相手を「弟・妹・小さな友だち」というように、自分より下の者へ伝えることを意識させている。いずれにしても、「話してみましよう」というように、他者へ伝えることを中心に、自己の読書の学びを発信させる活動が多くとられていることが分かる。そして、第1学年に比べて、読書への働き掛けが増えてきている。

### ③話題提供

- ・[日書]:「話し方のおけいこ」:話し方練習の話題が「読んだ本について」である。
- ・[東書]:「おはなし会」の発表として①夏休み読んだ本の朗読 ②雑誌を見て作品を作ったことの紹介  
:「ゆうびん」:「本をもらったお礼手紙」の採録
- ・[大書]:「なかなおり」:借りた本にまつわる物語  
:「書きぞめ」:言いたいことの内容に「学級文庫の本をたくさんよみたい。」とある。
- ・[光村]:「知らせたいこと」:話し合いや知らせたいことの内容として「私は童話を読むことが好き」『りょうかんさん』を読みました。学級文庫に入れておきます。」とある。

このように見てみると、「読書」の話題が取り上げられるパターンとして①話し合いのテーマ ②発表（または書く）内容の1つ ③その他に分類できる。

これらは、直接的な指導ではないが、間接的に「読書」を意識させる上で効果があるので

はないだろうか。また、[日書][東書]などは、A領域の指導であるとともに、読書の指導も兼ねているという点において、効果的な提示ではないかと言える。

### (3) 第3学年の読書指導のあり方

#### ①単元から

##### a. 単元名から

[日書]「読むたのしさ」、[東書][教出]「学級文庫」、[学図]「読書ノート」、[教出]「夏休みに読む本」、[光村]「読んだあとで」が見られる。

##### b. 特徴的単元

[日書]「●気持ちを読み取る \*けんか・クレヨン \*フランツのゆめ \*『シンデレラ』を読んで」では、物語→伝記→読書感想文例の単元配列となっている。第3学年になると読書の幅を広げる意味においても多くの発行社が「伝記」<sup>5)</sup>を採録している。また、読書感想文例が採録されている。ただ、この段階で読書感想文例のみで、書き方における指導等の記述はない。

[東書][教出]の両者には、「学級文庫」の単元が見られる。また、[学図]では「読書ノート」の単元の中に「学級文庫のやくそく」がある。[光村]「知らせ合って」の中にも学級文庫を扱った内容が記載されている。それぞれ、どのような単元かを見ていくこととする。

まず、[東書]の内容を整理して記す。

◇単元構成「●学級文庫 \*本のかしだし \*本を読んで」

\*教材 本のかしだし

・内容：本の貸し出しについて提案があり、貸し出すことに決定し、そのルールについて確認する。

・教材の文末：(先生の言葉)「これからは、本を読みっぱなしにしないで、読んだら、あとで、かんそうを話し合うようにしましょう。」

◇「手引き」に見られる読書に関わる働き掛け

・あなたたちが、学級文庫を利用するのに、こうしたらよいということはありませんか。あったら、もんだいを出して、みんなで話し合ってみましょう。

\*教材 本を読んで ・内容：給食の後、読んだ本について感想を発表する。

◇「手引き」に見られる読書に関わる働き掛け

・あなたたちも、いろいろな本を読んでみましょう。かんしんしたところは、友だちに知らせてあげましょう。

次に、[学図]の内容を、整理してみる。

◇単元構成「●読書ノート \*学級文庫のやくそく \*はくがのふえ \*読書ノート」

\*教材 学級文庫のやくそく

・内容：学級文庫のやくそく「なかよく楽しく読む・丁寧に扱う・もとのところ

に返却する・借りるときは手続きをする・読書ノートを書く」の5項目掲載

- \*教材 はくがのふえ ・内容：童話
- \*教材 読書ノート（読書ノートについては、後述する。）
  - ・内容：2人の児童の「読書ノート」例が掲載

次に、[教出]の内容を整理しておく。

◇単元構成「●学級文庫 \*図書がかり \*きびたきと船長 \*『きびたきと船長』を読んで」

- \*教材 図書がかり
  - ・内容：学級文庫の問題を解決するために、お願いしたいことを黒板に書き出す。
  - ・教材の文末：黒板にお願いする事柄が書かれている。さらに、「こんど『鳥の話』という本を買っていただきました。」とあり、その中に「きびたきを助けた船長の話」が載っていると紹介している。

◇「手引き」に見られる読書に関わる働き掛け

☆学級文庫について、みんなで話し合しましょう。

- ①学級文庫には、どんな本があるか。
- ②どんな本が多く読まれているか。
- ③学級文庫の本を、どんなふうにせいりしたら、みんなが読みやすくなるか。

☆本の読み方について、注意することをまとめてみましょう。まとまったことを大きな紙に書いて、教室にはっておきましょう。

- \*教材 きびたきと船長 ・内容：物語（実話）
  - \*教材 『きびたきと船長』を読んで ・内容：『きびたきと船長』を読んだ意見交流
- ◇「手引き」に見られる、読書に関わる働き掛けはない。

[光村]「知らせ合って」の中に、「みんなの黒板」がある。これは、黒板を活用して、学級の仲間に知らせたいことを伝えるというものであるが、その中に「文庫がかり 文庫の本はゆずり合って読む、読んだ本は元の場所に返す」ことが書かれている。

以上、同名または、同様の内容の4社の単元を見たのであるが、[教出]は、学級文庫の借り方等を話し合ったりするのではなく、決められた結果を提示するという方法をとっている。それに対して、[東書]は話し合いの形式をとり、[教出][光村]は書いて知らせるという方法をとっている。しかし、4社とも、利用指導<sup>9)</sup>として本を丁寧に扱うことや借り方、返却の仕方等のルールについての確認という点において共通している。

また、[東書][教出]の「手引き」を見ると、自分達の読書経験の中で考えさせながらよりよい読書生活をさせるべく、手引きで投げ掛けていることも共通している。

さらに、利用指導を行った後、[東書]では、先生がおっしゃった「これからは、本を読みっぱなしにしないで、読んだら、あとで、かんそうを話し合うようにしましょう。」を実践する形で、「給食の後での発表会」が採録されている。[教出]では、学級文庫に入った『鳥の本』の物語を紹介する「きびたきと船長」の物語を採録した後、話し合うという活動

を設定している。つまり、両者を見ていくと、自分達の身近な読書姿勢や読書生活を振り返る中で、読む楽しさを「仲間との交流」という発信方法によって共有できる単元配列となっている。[学図]では、その整理発信を「読書ノート」<sup>7)</sup>という形式を採用している。前述したように、読書ノート2例が提示されているが、その内の1作品が「はくがのふえ」を読んだものである。読書ノートに書く事柄として、「読み終わったら、読書ノートを書きましょう。かんそうを書かない人も、つぎのことだけは、正しく書いておきましょう。 ・読み終わった月日 ・本の名まえ ・その本を書いた人の名まえ ・本の番号」である。具体的に書く内容を示していることから、読書ノートにおける本格的な指導の第一歩と言える。

[学図]「読んで作る」では、文章を読みながら「風で走る自動車」を作る教材である。この活動は、自分で本を読んだとき、「作ってみよう」「次は、～を作ってみたいので、本を借りよう。」という主体的な姿勢を生み出すのではないかと考える。そして、子ども達にとっては、読書がただ読むものだけではなく、自分が何かするときに活用することができるという気付きをもたらすのではないかと考えられる。

[教出]「夏休みに読む本」の冒頭は、次のように始まっている。「もうすぐ夏休みです。(中略)ことしの夏休みには、おもしろいどうわの本を読みたい、という人がたくさんいました。先生が、『どんなどうわを読んだらいいか、そのうちに、話してあげましょう。』とおっしゃいました。きょうは、そのお話の第一回めです。(続けて、先生のお話二回目も掲載されている。)」とあり、第一回目『ピノキオ』、第二回目『グリムどうわ』を教師が語るという方式で採録している。そして、話の中に、色々な本の紹介がなされるのである。よい物語に出会わせる、幅広い読書を経験させるという指導において、「どのような本があるか」「どのような本を読むとよいか」という具体的な指導は効果的であると考えられる。この単元の手引きには、読書に関わる次のような投げ掛けがある。

☆夏休みには、わたしたちも、どうわの本をたくさん読みましょう。

- (1) 学級文庫にあるどうわの本をかりて読みましょう。
- (2) 長いお話でも、終わりまで読みとおすようにしましょう。
- (3) どんな童話を読んだか、読んでどんなことを考えたか、二学期のはじめに、みんなで話し合うことにしましょう。

そして、この(3)を受けて次の単元「お話し会」では、夏休みに読んだ『白雪ひめ』の話を中心に交流する単元が設定されている。

## ②読書への働き掛け

- ・[大書]:「おもしろい話」:おもしろ話に出てくるようなみじかいわらい話をしていたらみんなの前で話してみよう。
- ・[学図]:「りょうかんさん」:むかしの人のことを書いた本で、あなたが読んだものには、どんなものがありますか。

- ・[教出]:「●ものがたり \*あぶら売りのおじさん \*花のすきな牛」: 中国には、むかしから、よいお話やおもしろいお話がたくさんあります。(中略) せいようにも、うつくしいお話やいさましいお話がたくさんあります。中国のお話やせいようのお話を、先生に話していただいて、ききましょう。  
:「●せつめい文 \*犬の話」: 学級文庫に、動物のことをせつめいした本があったら、読んでみましょう。読んでわかったことを、みんなに話しましょう。  
:「●げんとう \*むかしのとけい」: とけいのことや、ラジオのことや、電気のかいのことなどについて、わたしたちにわかるように書いた本をえらんで、読みましょう。読んでわかったことを、みんなに話しましょう。  
:「●ものがたり \*夕づる」: 『夕づる』のような長いものがたりを、おしまいで読みとおすことになれましょう。
- ・[光村]: 教科書冒頭の「学習のはしら」の内容: 長い文しょうでも、おわりまで読みとおすようにしましょう。

[学図] では、多くの単元において、そこで学習した内容に関わる本について手引きで読むように促していることが分かる。読書に関する働き掛けとしては、「長い文章を読み通すこと」「採録された教科書教材に関わる書物を読むこと」が中心となっている。

### ③話題提供

- ・[日書]:「かべ新聞」: 壁新聞の記事の1つに「学校としょかんだより」がある。
- ・[東書]:「たのしい工作」:「親子やじろべえだよ。本に出ていたんだ。」
- ・[大書]:「かべ新聞」:「かべ新聞」の中に、「本をたくさん読む。学級文庫にある『三年生全集』を十さつ読みたい」とある。  
:「新年お話し会」: 次の中から、だいをえらんで、みんなの前で話してみよう。
  - ・自分の読んだ本のこと
- ・[学図]:「みんなで作ろう \*わかば新聞」: 新聞の中に、ニュースとして、新しい本が入った内容が図書係から報告されている。また、お話に関するクイズが載せてある。  
:「発表会」: 本文中に「児童館のそばに三重吉きねんひがあり、三重吉は、りっぱなどうわをたくさん書いた人だそうだ」と紹介している。
- ・[教出]:「新しい教室」: 3年生になってしたいこと・なoshたいことを話し合いの形式で提示。その中に、「学級文庫に本がそろった。ぼくはすきな本しか読まなかったがお話の本をもっと読みたい」「私はお話が好きだが、長いお話だと読むのをやめてしまう。」「(先生) 学級文庫の本を読もう」といった自己の読書生活を振り返る話題をもってきている。またこの中で学級文庫も話題に出している。  
:「かべ新聞」: 壁新聞の一つの内容に「図書がかり 新しい本 学級文庫に、つぎの三さつの本がはいりました」と紹介している。

：「手紙」：「年がじょう」に「おばあさん、おもしろい本を送って下さって、(中略)なんどもくり返しよんだので、すっかりおぼえてしまいました。」とある。

読書に関わる話題提供の内容としては、特に多くの発行社が「かべ新聞」を教材に取り上げており、その記事の内容の1つに図書館便り・学級文庫の本について等が見られる。また、[教出]「新しい教室」のように、読む本に偏りがあったこと、読み通すという面で弱さがあったこと等、自己の読書生活を振り返らせている。読書の質やより高い読書力の向上を図る指導がなされつつあると言える。

#### (4) 第4学年の読書指導のあり方

##### ①単元から

##### a. 単元名から

[日書]「調べる」や[光村]「聞いたことを役だてて」「調べるために、楽しむために」は、「調べ読み」<sup>8)</sup>を行わせるものである。

[学図]「広く読もう」は、「\*読書日記 \*いい本は心の中でいきている～図書館の話～」の教材が掲載されている。学校図書館利用や読書範囲を広げる指導として位置付いている。

[教出]「図書館」は、「\*本の話 \*野口英世」が採録されているが、[学図]同様、学校図書館の利用や読書量の増加に向けての指導である。

##### b. 特徴的単元

[日書]「むかし話」は、「\*語りつたえられてきた話 \*花かんざし \*二ひきのりゅう」で構成されている。「語りつたえられてきた話」は、昔話のよさについて書かれた文章である。ここで子ども達に、幼いころに読んでもらった昔話を想起させたり、昔話が時代を超えて語り継がれる何かをもっていると投げ掛けたりしている。そして、その後日本の昔話と中国の昔話の2作品を載せている。外国の作品に触れさせる、つまり読書の幅を広げるという点において[東書]「外国の童話」(ドイツ)、[大書]「菓草山」(中国)、「イカロスのつばさ」(ギリシャ神話)、[学図]「もえる山々」(スイス)等がそれぞれ見られる。

[学図]「のびていくもの」の中に「わたしの読書」がある。この単元は、自己の読書生活を振り返る文章で、文末には「わたしの読む本は、どうも、童話やでん記にかたよっていて、理科や社会科の本などになると、まだ、あまり気がすまない。これではいけないと思って、たまに手に取っては見るが、どうも読みつづける気にはならない。これでは、わたしの読書もまだまだだ。」とある。このような自分の読書傾向を振り返り、反省しながらも、思うようにいかないと考えている。この登場人物を介して子ども達自身自己の読書傾向を振り返る機会として、手引きには、「みなさんは、今まで、おもにどんな本を読んできたか、話しあいましょう。○ナイチンゲールについて、どんな人だったか、本でしらべましょう。」とある。9分類中心の読書生活がある故に「書物の幅を広げる指導が重要」になってくるのである。そして、さらに、低学年では「楽しみ読み」が中心であったが、中学

年になると、「調べ読み」を取り入れ、9分類以外の本のよさや活用の仕方を指導している。

同じく[学図]「広く読もう」は、前述したが「\*読書日記 \*いい本は心の中でいきている～図書館の話～」の教材が掲載されている。「読書日記」の登場は今回が初めてである。教材には、読んだ詩を書き写したり、読んだ本の内容を紹介したりしている。続いて、「いい本は心の中でいきている～図書館の話～」では、図書館を「ちえのくら」として、「①本は、なかまどうしならんでいる。②本はみんなのもの。③いい本は、心の中で生きている。」の3つの事柄について触れている。①では、本は内容によって分類されて書架に収められていることを述べている。②では、本を丁寧に扱うことの大切さを述べると同時に、本の装丁として、「表紙・せ・せ文字・とびら・口絵・おくづけ」の説明が挿絵によってなされている。そして、③では、本をじっくりと読むことの大切さについて触れている。読書への姿勢がどうあるべきかをこれによって伝えているのである。

[教出]「図書館」には、「\*本の話 \*野口英世」の教材が採録されている。「本の話」の教材では、教師が物語を読んだ後に、子ども達が好きな本を読むという設定で、その本を選ぶ状況にも触れている。教材の終わりには「わたしは、去年、ナイチンゲールのことを書いた本を読んだことがあります。こんどは、えらい学者のでん記を読みたいと思っていました。先生に、そのことを話したら、『では、この本を読みなさい。』とおっしゃって、『野口英世』という本をかしてくださいました。」とあり、「野口英世」の教材に続くのである。自分の求める本を探す方法や良書の紹介によって、より、読書意欲を向上させることにつながると考えられる。ここでも手引きで読書について多くの働き掛けがなされている。「図書館」では、「①わたしたちの図書館にはどんな本があるか、本はどんなふうにならんでいるか、調べてみましょう。②図書館の本を読むときは、どんな注意がたいせつか話し合みましょう。③今までに読んだ本と、これから読みたいと思っている本の名まえを表に書いてみましょう。」教師が話した『ロビンソン物語』『ガリバー旅行記』に対しては、「①教科書に書いてあるよりくわしく話してみましょう。②図書館の本で、ぼうけん物語やたんけん物語や、南極の話などを読みましょう。」「でん記」に対しては、「②図書館の本で、えらい人のでん記を読みましょう。」とあり、利用指導と読書指導の両面から指導がなされている。

[光村]の「聞いたことを役だてて」には、「図書の利用」という教材がある。図書館利用の手順が、ストーリー的に書かれている教材で、初めて「調べる」活動が登場している。社会科で、「くらしのうつり変わり」についてさらに調べるという設定となっている。「学校の図書室では、時々、昔話や物語などを読んではいませんが、社会科や理科のさん考書を利用するようなことは、ありませんでした。」(以前先生に本のさがし方を教えてもらっていた。)とあり、続いて、「図書の分類・整理・分類番号でさがす・目次でさがす・目次かきくいん」を見るとある。つまり、調べ学習の手順をここで学ぶのである。手引きには、「図書室で読みたい本を速くさがすには、どうしたらよいか、書き出してみよう。」とある。

同じく[光村]「目あてをはっきり」では、「感そうをくらべて」という教材がある。第三

位に入賞した人の作文（感想文指導）を参考に書き方を学ばせる単元である。自分達の感想は、あらすじを書き、2・3行感じたことを付け足しておく。感じたことと言っても、思いついたことを書き並べるだけ。順序立てて書くとかまとめて書くとかというようなことはあまりしない。それに対して、加藤さん（三位の子）は、あらすじなし。いきなり「特に強く感じたこと」を3つあげている。よく作品を読んでいる。「なぜ~だろうか」と問題をとらえて読んでいる。この物語から、自分は何を学ぶかという心構えが記されている。今までの、感想文例のみが提示してあるのとは違い、ここではよい作品と自分達の作品とを比べながら学んでいくという提示がなされている。

〔光村〕「長文を読む」では、「\*子ジカ物語 \*ざだん会」という構成になっている。本を読んで話し合うという方法であるが、このような取組がコミュニケーション能力<sup>9)</sup>にもつながると考える。

「調べる」「読書感想文を書く」の両活動に対して、第4学年になり具体的な指導がなされるようになったと言える。

## ②読書への働き掛け

- ・〔日書〕：「読んで話し合う」冒頭にある投げ掛け：同じ文でも、読む人によって感じ方がちがう。みんなで話し合うと、いっそうよい読み方ができる。
- ・〔東書〕：「外国の話」：いろいろな、童話の本を読みましょう。  
：「●物語 \*天下一の馬」：長い物語ですが、最後まで続けて読んでみましょう。他にも、おもしろい物語をさがして、読んでみましょう。
- ・〔大書〕：「薬草山」：読み終わったら次のことを「読書記録」に書いておきましょう。「読んだ日（何年何月何日）・本の名まえ・あらすじ・かんそう」とある。  
：「イカロスのつばさ」：このお話は、ギリシア神話の中に出てきます。ギリシア神話の本があったら、ほかの話も読んでみましょう。  
：「キヌーリ物語」：長い話です。最後まで続けて読んで、・・・とある。
- ・〔学図〕：「もえる山々」：このお話は、長い物語の一部です。全体を読んでみましょう。  
：「星の神話」：星や星ざについての神話やでんせつを読んでみましょう。  
：「自然のふしぎ」：自然の世界のしくみや、ふしぎなはたらきについて書いた本や、ざっしを読みましょう。  
：「学級文集」：学級文集に載せる原稿の1つに「世界めぐり」を読んでという感想文例が載せてある。  
：「でん記」：でん記を読んで、その中にえがかれている人の苦心や努力のあとを読み取り、自分の生活に生かすようにしましょう。

〔大書〕「薬草山」では、「読書記録」として、上記のように書く項目が提示されている。「読書記録」の具体例は載せていないが、項目の提示は、子ども達に分かりやすく、「読書ノート」とともに、読書姿勢の一つの方法として、具体的指導は生きると考える。

また、「長文」を読む指導が見られる。さらに、「伝記」では、「自分の生活に生かす」というように、読むことによって学び、それを自己の生活に生かし向上させることに目を向けさせる働き掛けがこの時期に見られる。しかし、多くの働き掛けは、第3学年同様、採録されているジャンルを広げるものである。

### ③話題提供

- ・[東書]：「緑の野山」：新しい図書館の費用として杉の木を切ったとある。  
：「放送」：「分からないことがあればすぐ調べることはよい」との表現が見られる。  
：「●まとめ \*夏休みの仕事」：夏休みに行く仕事として、「本を読むこと」とある。
- ・[大書]：「学級だより」：「学級だより」に載せる原稿に、童話を読むことが好きであるという文が見られる。
- ・[教出]：「●ノート \*学習の計画をたてよう」の計画の中に、「図書かんの本を読む。図書かんの本が読めるのはうれしい。物語やでん記をたくさん読みたい。」とある。  
：「●学級会 \*夏休みの研究計画」では、資料収集の方法として、「古いざっしや新聞をできるだけ多く集めて、・・・。」とある。  
：「学級新聞」の中に、「十月の行事 新聞週間始まる。読書週間始まる。」とある。  
：「なかよし黒板」では、見舞い状のお礼手紙の中に「国語で習った野口英世のことを思い出しました。」という文章が見られる。これは、伝記を学んだ事柄を想起してのことである。
- ・[光村]：「●文字や語くに気をつけて \*かべ新聞」に「学校図書館が広がる」という情報が載せてある。

読書に関わる話題提供の内容としては、第3学年に引き続き、「学級新聞」や「かべ新聞」の記事の1つとして位置付けられている。また、「調べるために読む」という姿勢に関わる内容も2社で見られる。

## (5) 第5学年の読書指導のあり方

### ①単元から

#### a. 単元名から

[日書]では「読むたのしさ」(第3学年)から「知る喜び」、[学図]では「広く読もう」(第4学年)から「知識を求める」「考える読書」のように、学年発達に応じて、広がりから、深さにも目が向けられていることが分かる。読むという姿勢を大切にしながら、学びの1つの方法としての読書の存在を自覚させる指導が単元名にも見られるようになった。

#### b. 特徴的単元

[日書]「知る喜び」には、2つの単元が採録されている。そこに読書に関わる働き掛けは見られないが、冒頭に児童への目標となる記述として「本を読んで、今までに知らなかった

ことを知るのは、ほんとうに楽しいものです。たしかな読み方によって、知識を、しっかりと身につけていきましょう。」とある。「楽しみ読み」の中で、新たな発見がある、それが自分の人生にとってかけがいのないものあれば、より読書意欲を増すことができると考える。また、同じく[日書]「●感想文を書こう \*考える力をのばす」では、先ず「考える力をのばす」で感想文を書く意義や効果を伝え、その後、例文を通してその具体化を図っている。この単元の冒頭には、「読んだ本についてでも、何か強く感じたことがあったら、すぐ、それを文に書きましょう。文に書くと、考えがよくまとまる」とある。感想文の提示では、[東書]「思ったこと考えたこと」の単元があり、冒頭に「(補 5年生が書いた作文について) それぞれ、どう思い、どう考えているか、考えながら読んでみましょう。」とある。そして、続いて「\*アンクル・トム物語」の感想文が採録されている。前者のように、感想を書くことの必然を理解させることは、より活動への意欲化を図ることができると考える。しかし、読書感想文においては、前述したように書き方における詳細な指導は教科書教材としては採録されていない。言い換えるならば、採録されている教材を通して、教師がいかに意識的に読書に関わる指導にあたるかが重要になってくると言えよう。

[東書]「本で調べる」では、2教材を採録しているが、前者は、「国語辞典・漢和辞典」後者は「百科事典で調べる」で、ともに調べ方を指導している。ここでは、「学習事典・百科事典」で調べる方法やそれを整理し要点を書くことを提示している。また、その調べる手順として、図書館の本が内容によって分類されていること・索引を見ること等についても触れている。百科事典で調べる学習は高学年で盛んに行われている。[学図]「●知識を求めろ \*辞書のひきかた \*本で調べる」の「本で調べる」では、子ども達が図書館へ行って国語辞典だけではなく、百科事典等を活用して、調べていくという方法での採録となっている。つまり、調べる過程を通して、課題追究の仕方とともに利用指導的な内容も網羅している。さらに、この単元の手引き欄には、「さくいん」の説明がある。課題追究の方法、「調べ読み」についての指導である。[光村]にも同様の単元がある。「●相手や場面を考えて \* (2) 辞書の利用 ~山田君の発表~」では、自分の調べ学習の過程を発表する形式を採用している。そして、辞書だけでなく、事典等にも目が向けられるように配慮している。

辞書や百科事典の活用では、課題追究の過程を示しながらどのように調べるとよいのか、どのような本を見ることが効果的かを示している場合が多い。

辞書を引く単元では、[大書]や[教出]に特徴が見られる。[大書]「●辞書 \*諭吉と辞書」では、福沢諭吉の伝記を通して、辞書の意義をとらえさせ、それを理解させた上で利用の仕方を指導する構成となっている。[教出]「●辞書 \*辞書作りの苦心 \*国語辞典のひき方」にも、同じような傾向が見られ、大槻文彦の辞書作りの苦労について伝記的に書かれた教材を提示し、続いて国語辞典の引き方につなげている。手引きでは、「図書館に『大言海』や『大日本国語辞典』があったら、どんな辞書かを調べ、作った人たちの苦心をしらべましょう。」とある。

調べるだけの辞書の知られざる一面を見ることによって、「使う必然」とともに、そこにある歴史的な重みを子ども達が知り、「辞書を引く」という形式的な行為以前に、「辞書ってすごいな」というその存在そのもののよさを感じ得る構成と言えるのではないだろうか。

「読書」を中心に据えた単元として、次の3社の特徴について触れておく。[学図]「●考える読書 \*読書について」では、清水幾多郎の読書について書かれた文章が採録されているが、先人の読書への思い、読書のあり方に触れることによって、どのようにあるべきかを子ども自身考える機会となる。手引きには、「科学的な説明文や、意見をのべる文章を、考えながら読んだり、調べながら読んだりして、読書のはんいを広げ、読む力をのばしましょう。」とある。

また、[教出]「●夏休みの読書 \*夏休みの読書について \*わたしたちのための世界の名作」では、先ず「読書」をテーマに話し合う単元であるが、話し合いの仕方と同時に、このテーマを取り上げ、実際に夏休みに多くの本を読ませる、そのために、どのような本を見ていけばよいかの具体的指導となるものと言える。単元の配列としては、読書について話し合い、そこで話題となった本について、教師が紹介するという形式をとっている。また、具体的に単元として設定はされていないが、「(夏休みが終わってから)読書発表会を開いたり、感想文集をまとめてたり」していくということ話し合いの中で決めており、実際の現場においても、そのような学習計画を立案する楽しみもある。読書を発展させていく、読書の学びを発信させていく方法としても、よい示唆となると考えられる。手引きには、次のような内容が提示されている。「◇『読書』について話し合いをしましょう。(1)今までの自分たちの読書について反省する。(2)これから、どんな本を、どんな風に読んでいったらいいか。(3)夏休みの読書のしかたについて ◇読書について、自分が考えていることを、かじょう書きにしてみましょう。◇あなたが読んだ世界の名作の一編を、友だちにしょうかいするつもりで、あらすじをまとめてみましょう。」とある。ここには、読書の振り返りとともに、これからの読書計画について考えさせようとしていることが分かる。また、同社の「●伝記 \*福沢諭吉」には「事典や参考書で、諭吉のことを、もっとくわしく調べてみましょう。・福沢諭吉のように、世の中のためにつくした人の伝記を読みましょう。読んでの感想も書きましょう。・五年生になってからどんな本を読んだか、ふり返ってみましょう。また、これから、どんな本をどんなふうに読んでいきたいか、めいめいの読書計画をたてましょう。」とある。

[光村]「いろいろな読み物」では、3つの教材が採録されているが、冒頭の目標のところに、「○自分の読書のしかたを反省して、どのような読書のしかたがよいか、考えてみよう。○読み物によって、どのような読み方をするのがよいか、くふうしてみましょう。」とある。ジャンルの違う読み物に目を向けさせると同時に、それぞれの読み物のよさを生かした読みをすることへの提言と言える。3つ中、2教材においては読書への投げ掛けはないが、「こがね虫」と言う教材の手引きに「長い物語を読むには、どんな点に気をつけたらよ

いか。まとめてみよう。」とある。

読書の意義、読書の仕方、読書の方向性等について問い、考えさせたり、話し合わせたりしているのがこの第5学年の時期だと言える。

[光村]「●必要に応じて \* (2) 心をひかれた人」は、伝記の扱いであるが、本文冒頭に、「1 最近読んだ伝記や物語などに出てくる人で、特に心を引かれた人はありませんか。

2 それは、何という本にのっているのですか。 3 なぜ、その人に心をひかれたか、その理由をわかりやすく書いて下さい。」とある。そして、それを学級新聞に載せるというのであるが、載せる作品として、「北里柴三郎・サリバン女史・イワン」を読んだ感想の文章が記されている。

その他、[東書]「テレビと読書」では、話し合い活動のテーマとして取り上げているのであるが、「読書」について子ども達に考えさせるという点においては、自己の読書生活の振り返りにつながると考えられる。また、[大書]「●奈良の都 \* 『古事記』の話」の單元では、読書への働き掛けの記述はないが、古典に関係のある文章を読み親しむことによって、伝統文化に目を向ける機会となると考えられる。

## ②読書への働き掛け

第5学年になり読書への働き掛けは、増加傾向にある。〈表2〉に整理してみた。

〈表2〉 昭和36年度使用教科書第5学年 読書への働き掛け記述 ※・印は、筆者がまとめたもの。

	[日 書]	[東 書]	[大 書]	[学 園]	[教 出]	[光村]
ジャンルに関わる作品を読む	古典	●むかしの本から ・(提示された作品を)読み味わう。		●げき*ぶす ・色々読む。		
	伝記	●伝記 ・生き方を教えてくれる。色々親しむ。	●あたたかい心 ・色々読む。		●伝記・見方や考え方をつかみ、自分の生活や意見と比べる。	
	紀行				●旅行記 ・色々読む。	
	新聞	●新聞 ・新聞を読む力を付ける。				
書く		●めずらしい話 ・新しい発見を書きとめる。	●アジアの文化 ・集め、作文に書く。 ●祭りのばん ・色々読んで読書感想文に書く。 ●雪という字 ・色々読んで読書記録に書く。	●よんで味わう ・人物に手紙を書く。 ・感想を書く。	●学級文集 ・感想を作文に書く。	
調べる					●海のとより・(提示された作品の国について)色々な参考書や事典で調べる。	●読みを深めて ・他の本でもっと詳しく調べる。 ●ことばのひびき ・他のものを探す。
劇にする						●表現をくふうして ・劇にしてみる。

【特徴】  
・「伝記」においては、伝記の特徴を生かした読み方の指導が見られる。  
・働き掛けの多くが、その単元の学習の中での読みを促していると言える。

### ③話題提供

- ・[日書]:「書きとめる」:先生から「読書について話したこと」を覚えているかの問いにある児童がメモを見ながら「読書は、知識を広めるばかりではなく、心を豊かにする」と書きとめたメモを見ながら返答する場面がある。メモを取ることの重要性を伝えるものであるが、その内容に読書を組み入れ、読書の重要性をそこに込めている。  
:「文をねる」:推敲する文に、「学級文庫」の話題が見られる。
- ・[学図]:「話し聞く生活」では、学級新聞を作成する話し合いであるが、話題の中に「市立図書館ができた」「図書館で読んだ本の感想」とある。
- ・[教出]:「記録」:「学級文庫から借りた『機械図かん』の中に・。」とある。  
:「発表」:「本で読んだことを発表する」という文言のみある。  
:「校内放送」:「幸田文『おふろ』」の文章が掲載されている。
- ・[光村]:「●必要に応じて \* (3) 校門のけい示板」:掲示板に書く内容に、学校図書館からのお願いとして、「いらぬ本を寄ぞうしてほしい」との呼びかけが見られる。

## (6) 第6学年の読書指導のあり方

### ①単元から

#### a. 単元名から

[学図]「読書と生活」、[教出]「調べる読書」、[光村]「読書の喜び」といった直接「読書」という表現を入れた単元名が見られる。

#### b. 特徴的単元

[東書]「●みんなで話し合う \* ガリレイと宗教さいばん」は、話し合いの単元である。その話し合いの題材が読書感想文であり、感想文を題材に自分達の考えを交流するものである。自分の考えを深めていくという点では、効果的だと言える。

手引きには、「あなたがたも、身のまわりの問題や、読んだ本の中の人物について、みんなで話し合って、考えを深めましょう。」とある。「考え読み」の指導がなされていると言える。

[大書]「●調査報告 \* のりを調べて」は、調べた内容を発表するという単元である。

つまり、「調べ読み」によって、課題を順番に解決することができることを体験を通して行うことを促している。手引きには、「問題を解決するためには、本を読み・・・」としていることから分かる。「調べる」内容は、[教出]「調べる読書」にも見られ、課題追究の手順とともに「調べる」方法も述べ、何をどのように調べたか、何を手がかりに調べたか等を具体的に記している。ここで、取り上げられている利用指導の内容についてあげてみることにする。

◇調べる方法：(総) 索引・目次・書名・ラベルの番号・目録 (カード)

◇調べた内容の整理：項目別索引カード (補 具体例掲載有)

：資料を読んで作ったわたしのメモ (補 具体例掲載有)

◇手引き：「調べるために読むほか、わたしたちは、どんなときに、本や書き物を読んでいますか。 ・研究題目を決め、事典や参考書を使って調べてみましょう。」

次に、[学図]「●読書と生活 \* 読書とわたしたち \* 宮沢賢治」では、「読書とわたしたち」の中で、読書の意義や本との出会いのすばらしさについて述べた後に、宮沢賢治の伝記へと続く。手引きでは「読書をじぶんの生活に生かすには、どうしたらいいか、考えてみましょう。 ・賢治の作品から、一編選んで読み、あらすじと感想を發表しましょう。 ・いい本を選ぶには、どうしたらいいか、みんなで話しあいましょう。」ただ読ませるのではなく、「読書」について書かれた教材を組み入れることによって、子ども達自身に具体的にその効果を理解させるようにしている。

[教出]「●夏休みの学習 \* (2) 読書」では、「夏休みの読書のために、先生が、世界の名作をしょうかいしてくださいました。」とあり、「エミールと少年たんてい団」「シートンの動物記」「長い冬」の紹介がなされている。手引きでは、「学級会を開いて、『夏休みの生活』『夏休みの読書』『夏休みの研究』等について話し合いましょう。 ・自分の読書のしかたについて反省してみましょう。 ①本の選び方がいいかどうか。②読書のしかたについて改善するところがないかどうか。」とある。長期の休みの過ごし方として、「読書」は有効である。そこに視点をあて、漠然と「読む」という働き掛けではなく、具体的にどのような本をどのように読めばよいのか、さらには、読んだことを広める手立てとして、学級会で交流する場を設定している。このように、理解し、実際に体験し、それを発信していくという一連の活動によって、読書への深まりができると考える。付記するが、[教出]では、第3学年「夏休みに読む本」、第4学年「学級会」、第5学年「夏休みの読書」、第6学年「夏休みの学習」の中で、夏休みにおける読書指導を単元として設定し指導している。

[光村]「読書の喜び」には、2つの教材が採録されているが、冒頭の目標には「今までにあなたが読んだ本で、よいと思ったのはどんな本だったか、思い出してみよう。よい本を選んで、できるだけたくさん読むようにしましょう。」とある。自己の読書生活を振り返らせるとともに、よい本を選ぶ目を養いながら、多くの本と出会わせ、読むことを指導している。手引きでは、「感動した読み物があつたら、おたがいに知らせ合ったり読んだりしよう。」と良書についての話題を互いに交流し、互いに読書の幅、読書力を付けるように促している。

## ②読書への働き掛け

読書に関する働き掛けを〈表3〉にまとめてみた。

〈表3〉 昭和36年度使用教科書第6学年 読書への働き掛け記述 ※・印は、筆者がまとめたもの。

		[日 書]	[東 書]	[大 書]	[学 園]	[教 出]	[光村]
ジャンルに関わる作品を読む	探検		●物語 ・色々読む。				
	物語				●美しい話・実話をもとにした物語を読む。		
	新聞						●読み物によって ・持ちよって読む。
書く・話し合う				●夜明け ・感動した部分を書く。 ●作文 ・新聞を読んで意見を書く。			●目的に応じて ・感想を書く。
話し合う・調べる				●日本の芸術 (提示された短歌と俳句の)意味を話し合ったり、本で調べたりする。			●読み物によって ・アンデルセンの童話を知っていたら互いに話し合う。
音読			●きょうげん ・役を決めて声に出す。				
発表				●旅 ・短歌と俳句の本を読み発表			
読書姿勢	作品		●人間の尊さ ・本の選び方の工夫		●物語 ・印象に残っている作品		
	調べ				●文章表現 ・図書館だけでなく博物館にも調べに行く。		
その他（働き掛けはないが、ジャンルの幅や読書への意識化につながるもの）			●新聞	●報告（補 新聞）		●大衆への伝達 (ラジオ・テレビ・えい画・新聞)	●国語に親しみながら ・(本から得た) 心に残る言葉

・多様な学習活動によって、読みの発信がなされている。  
・第5学年同様、働き掛けにおいては、その単元の内容によるものが多い。

## ③話題提供

- ・[日書]:「●大空 \*空へのあこがれ」の本文冒頭に、「西遊記」について触れられている。  
:「●卒業記念文集 \*ひとりひとこと」:「図書の整理についての反省」が述べられている。
- ・[大書]:「●日本のことば」:楽しい子ども会のお知らせとして童話の発表会とある。
- ・[光村]:「●目的に応じて書くには \*ある文集から」:文集の目次に、「読書の感想」「童話」とあり、「読書の感想」は、実際に例も載っている。

## 3. おわりに

昭和36年度使用教科書の6発行社の第1学年から第6学年の読書指導のあり方を、「読書に関わる記述」を中心に見てきたのであるが、各学年の特徴を次のように整理してみた。

第1学年では、昔話・童話・物語等を中心に、読書に興味をもたせるために、挿絵を活用したり、読み聞かせを行ったりすると同時に、教材そのものを提示し先ず読んでみるという指導が行われている。そして、その中で、[学図]に見られるような利用指導が低学年段階から行われている。ここでの利用指導は、一人一人の「読書への姿勢作り」が中心と言える。

第2学年では、読書の楽しさを発信したり、友達と共有したりする言語活動として、「紙芝居作り」や「お話を伝える」等が見られた。また、特徴的単元として、[学図]では1年生に引き続き行われている「利用指導と読書ノートへの働き掛け」が見られ、[教出]では、「ジャンルの広がり、他教科やいろいろな分類への働き掛け、読書生活への振り返りを促す」単元も見られる。「話題提供」では、話し合いのテーマとして「読書」が取り上げられているが、A領域の指導とともに、内容的には、読書指導を兼ねている単元と捉えることもできる。

第3学年では、学級文庫の活用や読んだり書いたりして友達に伝える（話し合う）という言語活動が多く見られる。特徴的単元では、[教出]の夏休みの読書指導がある。日常生活における読書活動の充実を図るという面において、具体的指導は効果的だと言える。

第4学年では、読書の幅を広げたり、読書の質を高めたりするために、①外国文学の採録 ②本の探し方や良書の見方 ③調べ読みによる読みの拡充がなされている。③の調べ読みでは、教材の中の子ども達が、学校図書館で調べるという設定のもとで、調べる過程を提示し、調べ学習の手順や調べる本の選出において指導している。そして、この調べ読みに伴って、利用指導においては、より具体的な内容が提示されている。特徴的単元では、感想文指導として[光村]のよい感想文と自分達の感想文との比較による指導も見られた。利用指導、感想文指導とも第4学年になると、内容の充実を図るために、繰り返すがより具体的指導がなされていると言える。

第5学年では、読書する必然を子ども達自身が理解し、納得できるような単元配列がなされていると言える。例えば、辞書や事典を活用しての調べ学習では、本来の目的である辞書や事典の引き方の指導をするとともに、一見形式的になりがちで、しかも子ども達に面倒だという思いを抱かせるこの行為に対して、辞書や事典等ができた時代背景やそこに携わった人達のことを伝えることは、その思いを払拭し活動に価値を持たせるようにしている。

第6学年では、例えば伝記を読む単元では、「自分の生き方」について考えさせたり、夏休みの読書指導では生涯の読書人の育成を目指して、読書の仕方、本の選び方、改善点等を見出させたりしている。

以上、第1学年から第6学年までの読書のあり方を整理したのであるが、この年代には、本の紹介（なお、各学年の教材文中に登場した本を〈参考資料〉として載せておく。この中には、単元名や教材名となっているものは入れていない。）のために特別なコーナーを設けたり学校図書館利用のための色々な情報を付録として提示したりすることは見られなかつ

た。特徴的単元や読書に関する働き掛けの内容を見ても、その単元や教材に関わる本を読んでもみという働き掛けが多くあったと言える。

「読書」から「読解」の傾向が強いこの時代において、読書指導はなされているものの、読書が全面に打ち出されているというよりも、読解指導の中に位置付けていると言える。

〈参考資料〉 昭和36年度使用教科書に見られる各学年で紹介されている本

学	[日 書]	[東 書]	[大 書]	[学 図]	[教 出]	[光 村]
1年			・きんたろう (絵)	・花さかじいさん ・うらしまたろう		・うさぎとかめ (絵) ・うらしまたろう (絵)
2年	・小びとの国	・小びとの国		・北風とお日様	・イソップ物語	・りょうかんさん
3年		・月世界旅行		・はごろも ・海さち山さち ・イソップ ・ロビンソン漂流記	・親指姫・白雪姫 ・赤ずきん・ブレーメンの音楽隊 ・みにくいアヒルの子 ・裸の王様・ナイチンゲール	
4年	・アンデルセン童話 ・浦島太郎 ・かさじぞう ・花咲じいさん			・イソップ・野口英世 ・リンカーン・ナイチンゲール ・こども詩集・さくのせい (中国)・白い太陽 (台湾の伝説)・十秒をめざして・手ぶくろを買いに・ノンちゃん雲に乗る・ロビンソン=クルーソー・せむしの子馬・(本の題名ではないが伝記の紹介として) ストウ夫人	・ロビンソン=クルーソー物語 ・ガリバー旅行記 ・むかしの日本 ・ナイチンゲール	
5年			・源氏物語 ・万葉集		・大言海・大日本国語辞典・こん虫の話・こん虫図かん・アンクルトムの小屋・アルプスの少女・十五少年ひょう流記・ジャングルブック (おおかみ少年)・クオレ・源義経・豊臣秀吉・紫式部・こん虫記・ぼくのこん虫記	・北里柴三郎：光をかかげた人たち ・サリバン女史：せい女物語 ・イワン：トルストイ童話集「イワンのばか」
6年	・西遊記			・風の又三郎・銀河鉄道の夜・どんぐりと山ねこ・セロひきのゴーンシュ・雪渡り・オッペルと象・雨ニモマケズ・グスコブドリの伝記	・万葉集・枕草子・源氏物語・子ども百科事典・標準社会科事典・児童年かん・学習年かん・音の話・光の話・新聞の話 ・(本文中に) 鳥取地方校外学習の手びき	

注

- 1) 田近洵一他1『国語教育指導用語事典 第三版』教育出版1984・10・25 p120 参照
- 2) 対象教科書は「1日本書籍」「2東京書籍」「3大阪書籍」「11教育出版」「17学校図書」「38光村図書」の6発行者「第1学年から第6学年（昭和36年～昭和39年使用）」の小学校国語教科書
- 3) 文部省『小学校国語指導書』二葉株式会社 1960・3・15
- 4) 1)に同書 p118 ・「読書のねらい 読書の目的からみると、次の三つに分けられる。」として、「楽しみ読み、調べ読み、考え読み」とある。
- 5) 6発行者の第3学年から第6学年の伝記が採録されている教材を整理したものが以下の表である。

【注5】 昭和36年度 伝記調査：読書への働き掛けの記述

【備考】①▲印：読書への働き掛けがない単元を指す。 ②■印：冒頭の目録から記述した教材 ③◎印：働き掛けの記述があるもの ④・印は、筆者が整理したもの

学	[日 書]	[東 書]	[大 書]	[学 図]	[教 出]	[光 村]
3年	▲フランツのゆめ	▲エジソンのくふう ▲雪舟	▲空をとぶ	◎りょうかんさん ・むかしの人のことを書いた本で、どのようなものを読んだか。	◎エジソンの小さいとき ・エジソンの本を読む。 ・他の偉人の本を読み感想交流。 ・ナイチンゲールの本を読んだこと。	
4年	▲ゆるるランプ ■めくらの大学者 ・(目標)調べる。	▲ゆうびんの父	▲コロンブス	◎小さいころのフェアブル ◎(わたしの読書 補：直接伝記を扱った教材ではないが、伝記を広める教材) ・どんな本を読んできたか。 ・ナイチンゲールについて調べる。 ◎でん記(十和田のひめます他2) ・でん記を読んで、じぶんの生活に生かす。	◎野口英世 ・偉人の伝記を読み、感じたことを書く。	▲フェアブル ◎人のために ・ほかの本で、ベストロッチのことをもっとくわしく調べて、発表しよう。
5年	■黒人の母 ■リンカーン ・(目標)伝記に親しむ。	◎モーツァルト ◎母の手紙 ・いろいろな人の伝記や物語を読む。 ▲良寛 ▲塩田の父 ▲けんび鏡とともに	▲諭吉と辞書 ▲この道 ▲マリーの勉強	◎科学者の道 ・伝記を読んで、自分の生活や意見と比べる。	◎福沢諭吉 ・諭吉について詳しく調べる。 ・読んだ感想を書く。 ・読んだ本、これから読みたい本等の読書計画作成の呼びかけ	◎心をひかれた人 ・心ひかれた人、その本とその理由を書く。
6年	▲農民の画家	▲富士山ちゅう ▲ペンの力 ◎人間の本分 ・意義のある読書ができるように、本の選び方の工夫。	▲細菌を追って ▲富士の絵	▲五輪の旗 ◎原始林の聖者 ・伝記を読んで自分の生き方を考える。 ◎(読書とわたしたち 補：直接伝記ではないが、次の単元につながる教材) ◎宮沢賢治 ・読書を自分の生活に生かす工夫。 ・作品を読みあらすじと感想の発表。 ・良書を選ぶ。	▲アルベルト＝シュワイツェル	▲ひるがえれ、五輪の旗 ▲牧野富太郎

第3学年から伝記が採録されている。中学年を中心に、「伝記を広く読ませる」働き掛けが多く見られる。そして、それを受けて、高学年では、その人物と自分の生き方を比べながら読むようにしたり、伝記という生き方に関わる本との出会いを契機に、良書の選び方についても考えさせたりしている。

6) 6発行社の第1学年から第6学年までの「利用指導」を、下記のように整理してみた。

〔注6〕 昭和36年度 利用指導調査：指導内容の具体と読書の働き掛けの記述

【備考】①●印：単元名 \*印：教材名とする。 ②・印は、筆者が整理した内容である。

学	[日 冊]	[東 冊]	[大 冊]	[学 図]	[教 出]	[光 村]
1 年				●本を読もう *本をだいに ・本を大事にすることを挿絵で提示（本の整理・手洗い・大切に扱うの3点）		
2 年				●本を読もう *がっきゅうぶんこ ・本の丁寧な扱い方を絵と文で提示（手洗い・頁を折らない・伏せない・つばをつけない・放り出さない・書架に片付けるの6点）		
3 年		●学級文庫 *本のかしだし ・本の貸し出し ルール提示		●読書ノート *学級文庫のやくそく ・本の扱いや学級文庫のルールについて文章で提示（なかよく楽しく読む・丁寧に扱う・もとのとところに返却する・借りるときは手続きをする・読書ノートを書くの5点）	●学級文庫 *図書がかり ・丁寧に扱うこと と本の貸し出し ルール提示	●知らせ合って *みんなの黒板 ・ゆずり合って読む、読んだ本は元の場所に返すの2点
4 年				●広く読もう *いい本は心の中でいきている～図書館の話 ・図書館の話では、本の分類、本を丁寧に扱うことと同時に、本の装丁（表紙・せ・せ文字・とびら・口絵・おくづけ）を絵によって説明。		●聞いたことを役だてて *図書館の利用 ・図書の分類・整理・分類番号・目次・さくいん
5 年		●本で調べる *百科事典で調べる ・分類・索引		●知識を求める *本で調べる ・索引		
6 年					●調べる読書 ・（総）索引・目次・書名・ラベルの番号・目録（カード）	

第3学年では、多くの発行社が「学級文庫」を中心にして「本の扱い方や貸し出しのルール」について指導している。中でも、[学図] は第1学年から第3学年において発達段階に応じて繰り返し指導できるようにしている。  
第4学年になると、調べ学習に伴い「調べるために読む」活動が活発になってくるために、本の探し方や本への迫り方について図書に関わる具体的な名称を提示し、指導の円滑化を図っていることが分かる。

7) 6発行社の第1学年から第6学年までの「感想文・読書ノート」に関わる指導について下記の表のように整理してみた。

〔注7〕 昭和36年度 ◇感想文・◆読書ノート指導調査：提示・指導内容の具体と読書の働き掛けの記述

【備考】①◇印は感想文、◆印は読書ノートについて述べられている単元を指す。②\*印は、教材名を指す。③・印は、筆者が整理したもの。

学	[日 書]	[東 書]	[大 書]	[学 園]	[教 出]	[光 村]
3年	◇気持ちを読み取る *『シンデレラ』を読んで・感想文のみ提示			◆読書ノート *読書ノート ・読書ノートの内容とノート例2点提示(読み終わった月日・本の名まえ・その本を書いた人の名まえ・本の番号)		
4年			◆葉草山 ・読書記録の内容提示(読んだ日:何年何月何日・本の名まえ・あらすじ・かんそう)	◆広く読もう *読書日記 ・「読書日記」の具体例提示 ◇学級文集 *『世界をめぐる』を読んで・感想文のみ提示		◇目あてをはっきりと *感そうをくらべて ・よい感想文から書き方を学ぶ。
5年	◇感想文を書こう *考える力を伸ばす ・感想文を書く意義や効果を伝え、その後例文を通してその具体化を図る。	◇思ったこと考えたこと *アングル・トム物語 ・冒頭に「考えながら読む」とあり、「アングル・トム物語」の感想文のみ提示			◇学級文集 ・感想文のみ提示 ◆伝記 *福沢諭吉 ・(「読書計画」ということばが見られる。)	◇必要に応じて *心をひかれた人 ・北里柴三郎、サリバン女史、イワンについての感想文が提示
6年		◇みんなで話し合う *ガリレイと宗教さいばん ・話し合いの題材が感想文				

〔◇感想文の指導について〕

・多くが、感想文そのものを採録し、児童に提示している。しかしその中で、[日書]の高学年では、感想文を書く意義を説明的な文章によって理解させているものもある。また、[光村]の中学年のように、よい感想文を題材に、その書き方を学ぶといった具体的な指導も見られる。話題としての活用では、[東書]の高学年でも見られるが、話し合うことを通して、感想をより深めていくという活動は、発展して書くことにもつながってくると考えられる。

〔◆読書ノートの指導について〕

・「読んだ感想をノートに書こう」という働き掛けは多くあるが、具体的にその書き方や事例を提示した単元は少ない。[大書]では項目を、[学園]では項目と具体的作品を提示している。また、[学園]では、「読書日記」という読書の記録の日記も具体的に提示している。また、名称のみの登場であるが、[教出]の「読書計画」ということばも見られる。

8) 井上一郎著『読書力を伸ばす読書指導 ～カリキュラム作りと授業づくり～』

明治図書 2005・10 p93

・「調べ読み、比べ読み、批判読み」等を「読書行為」と捉えている。

9) 中原國明他1『国語科授業用語の手引き』教育出版

2006・7 p103～104参照(波線に記した部分を参照した。)

「コミュニケーション能力」と筆者は記したが、読書をより楽しくするために今学校現場では読書したことを互いに伝えたり交流したりする活動が盛んに行われている。その活動には、例えば、「読書アニメーション」「ブックトーク」「ストーリーテリング」等がある。友達とのコミュニケーションを活発にしながら互いの考え方を理解しようとする姿勢にもつながると考える。